教育研究業績書

2020年10月27日

所属：教育学科　　資格：講師　　氏名：大和　晴行

研究分野	研究内容のキーワード
保育学，幼児教育学，乳幼児健康学	乳幼児期の健康，手指の器用さ，姿勢の発達，体力・運動能力，基本的生活習慣，生活技術，乳児保育
学位	**最終学歴**
修士（学校教育学），学士（学校教育学）	兵庫教育大学大学院　学校教育研究科　学校教育専攻(幼年教育コース)修士課程　修了

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
1. 初等応用実習－地域社会と幼児の実態に応じた教育実習－	2015年3月	兵庫教育大学における幼稚園教育実習（実地教育Ⅳ）を行う学生を対象とした実習手引きである。「第3章3. 幼稚園における特色ある実践」「第4章1. 保護者への対応と支援」を担当した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 小学校教諭専修免許状	2011年3月31日	
2. 幼稚園教諭専修免許状	2011年3月31日	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		
1. 日本幼少児健康教育学会濱田精一賞	2017年8月27日	対象研究発表「幼児期における手内操作スキルと遊び状況との関連」日本幼少児健康教育学会第35回大会春季世田谷大会発表
2. 日本幼少児健康教育学会　中永征太郎賞	2014年9月14日	対象論文「活動的な遊びにおける親の遊び態度と子どもの遊び状況との関連性」『幼少児健康教育学研究』第20巻第1号

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. MINERVAはじめて学ぶ保育　保育所・幼稚園・幼保連携型認定こども園実習	共	2018年3月30日	ミネルヴァ書房	保育者養成における各種実習の事前指導、事後指導向けの教科書。そのうち「レッスン1 実習とは（p.2~p.15）」「レッスン10 指導実習と実習指導案の作成（p.118~p.133）」、「レッスン11 実習指導案の書き方の実際（p.134~p.147）」を担当した。「レッスン1 実習とは」では、実習の意義や心構え、必要な手続きや事前訪問時の留意点等を解説した。「レッスン10 指導実習と実習指導案の作成」では指導案作成の意義や各項目の書き方やその留意点を解説した。「レッスン11 実習指導案の書き方の実際」では、様々な活動の指導案を取り上げ、作成時のポイントについて解説した。 （担当頁：P.2~P.15、P.118~P.133、P.134~P.147） （共著者：亀山秀郎、井上裕子、中重直俊、野口知英代、椋田善之、大和晴行）
2. 保育者論　-子どものかたわらに-	共	2017年9月20日	株式会社みらい	保育者志望学生向けに、保育職の概要や、保育者の役割、専門性について解説したテキストである。そのうち「第10章第3節・4節」の執筆を担当し、保育者の職能形成における研修や研究の重要性、今後の保育者のキャリアパスについて解説すると共に、保育集団としての苦情解決方法についても解説を行った。 （担当頁：160-167） （共著者：小川圭子，柏まり，川村高弘，栗岡あけみ，久米裕紀子，鎮朋子，永井毅，中重直俊，腹巻

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
				真須美，日坂歩都恵，二見素雅子，松本千幸，大和晴行，和田真由美）
3. 幼少期の運動遊び指導入門－元気っ子を育てる運動遊び－	共	2015年5月25日	創文企画	乳幼児期の発育発達の特徴の解説と共に、運動遊び実践例を挙げながら、保育者としての実践上の配慮事項を解説した運動遊びの指導書である。その中の、第2章「1.身近なもので遊んじゃお」で主にすぐ手に入る生活物を活用した遊びの保育展開例、保育者の配慮事項を解説すると共に、第2章「2.移動遊具で遊んじゃお」では、跳び箱やマットなどの保育現場でも指導頻度の高い移動遊具を取り上げ、保育展開例、保育者の配慮事項を解説した。 （担当頁：P.42-54，P.55-67） （共著者：坂口正治，嶋崎博嗣，大和晴行，米野吉則，北尾岳夫）
4. 保育者をめざすあなたへ 子どもと健康	共	2014年4月	株式会社みらい	保育者志望学生向けに子どもの健康や発育発達について論述したテキストである。その中の，「第2章保育における領域「健康」（P.20-P.32）」において教育要領及び保育指針の解説を行い，「第3章発育と発達（P.39-P.49）」においては,主に神経系の発達と子どもの上肢・下肢の発達について解説し，「第5章子どもを取り巻く環境の現状（P.67-P.73）」では，調査データを用い,子どもの生活・遊び状況の現状と課題について解説した。 （担当頁：P.20-P.32，P.39-P.49，P.67-P.73） （共著者：勝木洋子，倉真智子，日坂歩都恵，大和晴行，他13名）
5. 新・保育内容シリーズ 第1巻「健康」	共	2010年5月	一藝社	主に保育内容健康に焦点を当て，保育の基礎理論と実践について論述した解説書である。その中の，「第3章心身の健康に関する領域「健康」の位置づけ」を担当した。保育所保育指針の内容を取り上げ，保育の目的や健康領域のねらいや内容について具体的な例を挙げながら解説した。 （担当頁：P.41-P.54） （共著者：谷田貝公明，嶋崎博嗣，高橋弥生，大和晴行，他12名）
2 学位論文				
3 学術論文				
1. 活動的な遊びにおける親の遊び態度と子どもの遊び状況との関連性（査読付き）	単	2014年3月	幼少児健康教育研究 第20巻第1号（P.13-P.22）	乳幼児との活動的な遊びにおける親の遊び態度尺度を作成し,子どもの遊び状況や活動性との関連を検討した。結果,親の遊び態度として「遊びへの積極的関与と共有」及び「遊びの保障と発展的関与」を下位尺度とする2因子構造が確認された。こうした親の遊び態度は0歳など低年齢であるほど高くなるなどの変容が確認されると共に,親の遊び態度が0歳児以降ほぼ全ての年齢で,多様な遊び経験の豊富さや子どもの活動性の高さと関連していることが確認された。
2. 幼児が正しい箸の使い方を習得することをねらいとした食育実践に関する研究－家庭での保護者の教授を促す実践の開発と効果の検討－（査読付き）	共	2012年6月	幼少児健康教育研究 第18巻第1号（P.19-P.27）	5歳児を対象に正しい箸の使い方の獲得を目標とした食育実践を行った。保護者が教授するためのチェックシートや歌や手遊びの開発,箸を使える遊びコーナーの設置など行い,8か月間の実践を行った。結果,実践後は35.7%の幼児が正しい持ち方を習得し，全国的な大規模調査に比べ有意に高い習得率につながった。課題として,さらなる習得率の向上のためには,幼児の手指の巧緻性そのものの向上に取り組む必要性を示唆した。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能） （共著者：廣陽子,大和晴行）
3. 保育者志望学生の生活技術の現状と獲得過程に関する研究	単	2011年3月	幼年児童教育研究 第23号（兵庫教育大学幼年教育コース研究紀要）（P.31-P.39）	保育者志望学生を対象とした生活技術獲得過程の調査から，正しい技術を身に付ける上で留意すべき点を検討した。結果，養育者以外に保育者の関与が技術レベルの高低に影響を及ぼしていること，教授方法では，大人はモデル機能は果たすものの，型付けやコツの伝授は行われていないことが確認された。結果を踏まえ，正しい生活技術を身に付ける上で留意すべき点として,教授人物の増加,型付け・コツの伝授の実施,保育者の技術レベル向上の3点を挙げた。
4. 体育関連科目受講学生の体力と運動習慣に関する研究	共	2010年3月	湊川短期大学紀要 第46集（P.61-P.69）	保育者志望学生の体力状況，運動習慣に関する調査を行い，体育関連科目の基礎資料を得ることを目的とした。結果，女子学生の筋持久力の値がとりわけ低く，将来，保育現場での外遊びや低年齢児保育の中で怪我や疲労が蓄積しやすくなる可能性が示唆された。また，学生の多くは体力の重要性は認識しつつも，時間的余裕のなさから運動習慣が確立できないでいる状況が確認された。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能）

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				（共著者：大和晴行，矢野正，倉真智子）
5. 保育者志望学生の生活技能の現状と保育者養成の課題 －実技調査及び学生の振り返り記憶からの考察－	単	2009年3月	幼年児童教育研究 第21号 （兵庫教育大学幼年教育コース研究紀要） （P. 61-P. 71）	保育者志望学生の生活技術レベルの現状と技術獲得過程を検討した。結果，保育者志望学生は箸，鉛筆等の技術レベルが自立域に達しておらず，保育現場で教授困難な状況であった。また技術レベルと自己認識に隔たりがあり，認識と実際の技術レベルとのギャップを埋める必要性を示唆した。技術獲得過程の検討から，正しい生活技術獲得には保育現場が動作学習できる場として重要であることが示唆された。
6. 幼児の生活技術の現状と背景問題－兵庫県下H幼稚園児に対する実態調査から－（査読付き）	共	2008年3月	幼少児健康教育研究 第14巻第1号 （P. 2-P. 11）	幼児に箸，鉛筆，雑巾等の使い方に関する実技調査及び観察調査を行い，生活技術レベルの現状把握と共に、幼児の発達、生活上の課題を検討した。結果，幼児の生活技術の水準は全体的に低いまま移行していること，また，直接体験不足に伴う身体学習機会の減少が動きのぎこちなさにつながっており，特に，清潔の早期自立傾向が、身体感覚の違和感や拒否感に繋がっている可能性を示唆した。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能） （共著者：大和晴行，嶋崎博嗣）
7. 男性保育者の独自性に関する探索的研究－幼児のインタビュー調査による両性保育者のイメージ比較－（査読付き）	共	2007年2月	運動・健康教育研究 第15巻第1号 （P. 12-P. 19）	幼児が抱く女性保育者，男性保育者のイメージに差異があるか，幼児へのインタビュー調査から比較検討した。結果，男性保育者は技術的援助の印象が多く語られ，女性保育者は情緒的援助の印象が多く語られた。また，保育者の性別に関係なく遊びの共有場面の印象が多く語られた。保育者の無意識的な行動の偏りや，幼児自身の性役割観が女性保育者，男性保育者のイメージの差異に影響している可能性が示唆された。現段階での男性保育者の保育現場参入の意義についても検討し，性役割観が強い男児に対して大人との接触保障や感情体験の多様性を挙げた。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能） （共著者：大和晴行，嶋崎博嗣）
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
２．学会発表				
1. 幼児における立位姿勢時の姿勢アライメントの経時変化	共	2018年2月5日	日本幼少児健康教育学会第36回大会【春季：朝霞大会】	幼児期における姿勢の分類化とその変化を縦断的に検討を行った。調査は保育所に通う3～5歳児84名を対象とし、動画撮影から静止画像を切り取り、姿勢アライメント４項目の角度を算出し検討を行った。結果、3歳から4歳にかけて姿勢の経時変化が認められる一方、4歳から5歳にかけては経時変化が少なく、良い姿勢群も悪い姿勢群も4歳時点の姿勢がそのまま維持される傾向が認められた。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能） （共著者：米野吉則、廣陽子、大和晴行）
2. 幼児における立位姿勢の類型化	共	2017年3月	日本幼少児健康教育学会 第35回大会春季世田谷大会 発表抄録集 （P. 22-P. 23）	3歳児から5歳児の幼児を対象に、力学的平衡に視点を置き、幼児の立位姿勢の類型化を行い、その特徴を検討した。姿勢アライメント4項目とバランス指標5項目からクラスター分析を行なった結果、幼児の姿勢は「理想型」「出腹出尻型」「骨盤前傾型」「頭部前傾型」「巻き肩型」の5分類に類型化でき、幼児期においても顕著な腰椎の湾曲、頭部前方移動、肩甲骨の突出などの傾向を有する幼児が一定数以上いることなどが確認された。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能） （共著者：米野吉則、大和晴行、廣陽子、阪江豪、村上史子）
3. 幼児期における手内操作スキルと遊び経験との関連	共	2017年3月	日本幼少児健康教育学会 第35回大会春季世田谷大会 発表抄録集 （P. 24-P. 25）	保育園に通う2歳児から5歳児の幼児を対象に、手指の器用さの一つである手内操作スキルのレベルと遊び状況との関連性を検討した研究。結果、2歳から3歳にかけては構成遊びや様々な道具操作の経験が基本的な手指機能の向上に影響していることが確認された。また、5歳ごろからは、自然物など指先の微細なコントロールが必要とされる操作経験の保障が、より複雑なハンドスキルの獲得に影響していることが確認された。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能） （共著者：大和晴行、廣陽子、阪江豪、米野吉則、村上史子）
4. 子どもの遊びの特徴と運動能力との関係	共	2015年9月	日本幼少児健康教育学会 第34回大会秋季赤穂大会 発表抄録集 （P. 78-P. 79）	保育園に通う3歳児から5歳児の降園後の遊びおよび休日の遊び状況の特徴を検討すると共に、運動能力との関係を検討した。結果、3歳から5歳のそれぞれの段階において、戸外や自然物を使用する活動的な遊びの頻度が高い幼児ほどボール投げに代表される、身体の連動性や協応性が求められる運動能力が高

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				い傾向にあることが確認された。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能） （共著者：阪江豪、大和晴行）
5. 幼児期における手内操作スキルと保育士評定による手指の不器用さとの関連	共	2015年9月	日本幼少児健康教育学会 第34回大会秋季赤穂大会 発表抄録集 （P.80-P.81）	保育園に通う2歳から5歳の幼児を対象に、手内操作スキルの実技調査を行い、スキルレベルの実態把握を行うと共に、スキルレベルと保育士が保育中に実感している手指の不器用さとの関連性を検討した。結果、各指の独立運動を必要としないスキルは2歳児でも多くが獲得している一方、拇指、示指、中指の3指の指節間関節のコントロールを必要とし、指の屈曲と伸展の交互運動が必要なスキルは獲得状況が5歳児でも低いことが確認された。また、各種スキルの低さと、保育活動中の手指の不器用さとの間には2歳から5歳それぞれの段階で関連性が認められた。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能） （共著者：大和晴行、廣陽子）
6. 保育者が実感している0歳から6歳の子どもの動きのおかしさに関する調査研究	単	2014年5月	日本保育学会 第67回大会 発表要旨集 P.870	保育士が実感している乳幼児期の姿勢制御，運動動作の課題について実態把握を行い、子どもの運動発達上の課題についての基礎的資料を得ることを目的とした。事前に作成したチェックリストに従い，0歳児から6歳児569名について担任保育士により動きのおかしさを評価してもらった結果,0歳児から継続的に実感されている課題として姿勢保持、手指の巧緻性、自己制御に関連する課題が確認された。
7. 保育者養成における生活技術レベル向上を目指した授業実践に関する研究－学生同士の教え合いが技術レベルや教授意欲に及ぼす影響－	単	2011年9月	日本幼少児健康教育学会 第30回大会 【秋季：大阪大会】 発表抄録集 P.26-P.27	保育者志望学生に対し箸の持ち方，鉛筆の持ち方，雑巾の絞り方といった生活技術を身に付けるため，学生の「教える－教えられる」関係を軸としたグループワークを実施した。授業内で10分間，先生役の学生が子ども役の学生に「型付け」を中心に教える実践を計3回実施した。実践後，　約7割の学生が正しいやり方を身に付けると共に，実践後1カ月を経過してもその状況が継続しており，実践の効果の一定期間の定着が確認された。 （共著者）大和晴行,廣陽子
8. 保育者志望学生の生活技術の現状－実技レベルと生活技術への認識－	単	2010年5月	日本保育学会 第63回大会 発表要旨集 P.680	保育者志望学生に対し，箸を使う，鉛筆を使う，雑巾を絞る，のこぎりで切る，花結びするの5項目について実技調査を行い，実技レベルとそれぞれの技術に対する学生の重要性評価との関連性を検討した。結果，技術レベルに関わらず，学生の各生活技術に対する重要性評価は高いことが示された。しかし，のこぎりで切るのみ，技術レベルに関わらず重要性評価が低く，幼児期における刃物使用に対し積極的意義を感じていない学生が多いことが示された。
9. 保育者志望学生の生活技術の現状と獲得過程に関する研究	単	2010年3月	日本幼少児健康教育学会 第28回大会 【春季：朝霞大会】 発表抄録集 P.78-P.79	保育者志望学生を対象に，生活技術実技レベルの差異により技術獲得の過程が異なるか検討した。結果，雑巾の絞り方など一部の生活技術において，間違ったやり方をしている学生ほど保育者に教えられた経験があることが示されるなど，保育者が生活技術の獲得の際に大きな影響を及ぼしている可能性が示唆された。
10. 食育実践における幼児及び保護者の食行動の変化Ⅱ －質問紙調査による実践効果の推定－	共	2009年5月	日本保育学会 第62回大会 発表論文集 P.549	食材を全て用意するところからはじまる，食を巡る一連の過程を重視したみそ汁作り活動が幼児の食行動に及ぼす影響を検討した。アンケート調査の結果，幼児は食材調達の体験などから食材への興味関心が高まると共に，調理に対する興味関心も有意に高まることが示された。また，家庭内の保護者にも影響があり，実践前に比べ幼児の手伝い行動を許容する保護者が有意に増加したことが示された。降園前の保護者による試食タイムがわが子の育ちを感じるきっかけとなり，幼児の調理行動に対する許容範囲が広がったと考えられた。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能） （共著者：廣陽子，大和晴行）
11. 保育者志望学生の生活技術の現状と保育者養成の課題－実技調査及び振り返り記憶からの考察－	共	2008年9月	日本幼少児健康教育学会 第27回大会 【秋季：大阪大会】 発表抄録 P.22-P.23	保育者志望学生の生活技術レベルの現状把握と，技術獲得過程を検討した。結果，保育者志望学生は箸，鉛筆，雑巾等の技術レベルが自立域に達しておらず，将来，保育現場での教授は困難な状況であることが示された。また，質問紙調査から，学生が過去に教授された時期や教授してくれた人物について検討を加えたところ，比較的技術レベルが高い生活技術には保育者や小学校以上の教員が教授にかかわっていることが明らかとなった。正しい生活技術獲得には，保育現場が動作学習できる場として重要な役割を果たしている可能性を示唆した。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能） （共著者：大和晴行，嶋崎博嗣）
12. 幼児キャンプ活動とストレス反応－簡易ストレス測定器を用いたア	共	2008年9月	日本幼少児健康教育学会	自然体験活動が身体に及ぼす影響側面を検討するため，アミラーゼ活性の測定を実施した。結果，3泊4

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
ミラーゼ活性の変動に着目してー			第27回大会 【秋季：大阪大会】 発表抄録 P.28-P.29	日のキャンプにおいて1～2日目は比較的高い測定値を示したが，3日目以降はそれまでと比べ有意に測定値は低下した。ストレス低下の要因として「キャンプ生活への適応」やプログラムの内容を勘案し「克服，成功体験の達成感，満足感による快感情」などの心理的変化により，ストレス減退につながった可能性を示唆した。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能） （共著者：谷口博也，嶋崎博嗣，大和晴行，廣陽子）
13. 食育実践による幼児及び保護者の食行動の変化Ｉ－実践仮説と概要－	共	2008年5月	日本保育学会 第61回大会 発表抄録集　P.577	これまでに行われてきた食育実践の先行研究の検討から，これまでの食育実践の課題を抽出し，新たな食育実践モデルを考案することを目的とした研究。結果，これまでの食育実践の課題として以下の点が明らかになった。第1に質問紙，対照園を設けるなど客観的手法での評価が行われてこなかったこと，第2に園から幼児，保護者といった単一方向モデルが多く，園－幼児－保護者の3者の相互作用を視野に入れ実践モデルが生成されてきていないことが課題として浮上した。以上の課題を踏まえ，本研究では今後必要と思われる食育実践モデルについての提案を行った。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能） （共著者：廣陽子，大和晴行，嶋崎博嗣）
14. 幼児の自然とのかかわりに関する保育実践の効果と課題	共	2008年2月	日本幼少児健康教育学会 第26回大会 【春季：野田大会】 発表抄録集 P.46-P.47	幼児と自然とのかかわりを重視した保育実践が，幼児の育ちに及ぼす影響を保護者に対するアンケート調査から評価した。結果，栽培活動や飼育による実践展開は，年長女児，年少男女児には効果的に働き，自然への興味関心を高めるものの，年長男児の興味関心には反映しなかった。自然に関する保育実践は栽培、飼育といった「自然への養護的かかわり」のみならず，自然とダイナミックに触れ合う活動が重要であり，両者をバランスよく幼児が体験できる工夫が必要であることを示唆した。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能） （共著者：大和晴行，嶋崎博嗣，谷口博也 廣陽子，田中敏也）
15. 保護者評価による幼児キャンプ参加児の生活行動の変容－事前・事後評価の比較を通して－	共	2007年9月	日本幼少児健康教育学会 第26回大会 【秋季：南大阪大会】 発表抄録集 P.64-P.65	3泊4日の幼児キャンプ体験後の参加幼児の日常生活における変容を質問紙調査から検討した。結果，キャンプが影響を及ぼす幼児の成長側面として，「自己コントロール」「感性」「態度」「自立・挑戦」の4因子構造が確認された。キャンプ前後では「自立・挑戦」因子に有意な差が認められ，幼児期のキャンプ活動が自立心や挑戦心の成長と関連する可能性が示唆された。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能） （共著者：谷口博也，嶋崎博嗣，大和晴行，三宅孝昭，北尾岳夫）
16. 幼児期における両性保育者の存在意義に関する研究－幼児に対するインタビュー調査による両性保育者のイメージ把握を通して－	共	2007年2月	日本幼少児健康教育学会 第25回大会 【春季：野田大会】 発表抄録集 P.86-P.87	幼児に対するインタビュー調査から両性保育者の幼児への影響，及び両性保育者の存在意義を探索的に検討した。結果，男性保育者は身体を用いた活動性が，女性保育者は情緒的援助といったやさしさを伴う表現性が幼児の印象に残りやすいことが示された。結果から，両性保育者の存在意義に触れ，幼児は両性保育者に対して差異を感じているものの，それは決して否定的に捉えられるものではなく，遊びの中で幼児の多様な快の感情体験に繋がっていることを示唆した。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能） （共著者：大和晴行，米野吉則，谷口博也，嶋崎博嗣）
17. 幼児の自然体験活動が自律神経機能に及ぼす影響	共	2007年2月	日本幼少児健康教育学会 第25回大会 【春季：野田大会】 発表抄録集 P.90-P.91	自然体験活動が幼児の自律神経機能に及ぼす影響を「歩数」及び「体温」の測定から検討した。結果，自然体験活動時の幼児の活動量は、日常生活時に比べ少なくなるにもかかわらず，体温変動幅は有意に増加することが示された。このことから自然という環境やキャンプ特有の生活リズムが幼児の生体に影響を及ぼす可能性を示唆した。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能） （共著者：谷口博也，大和晴行，米野吉則，嶋崎博嗣）
18. 幼児の起床・就寝時刻の規則性と朝の生活状態	共	2006年3月	日本幼少児健康教育学会 第24回大会 【春季：青山大会】 発表抄録集 P.62-P.63	幼児の起床就寝時刻の規則性に焦点を当て，5日間の生活記録から得られる連続データの標準偏差を規則性の指標とし，朝の生活状態との関連を検討した。結果，起床時刻の規則性は自立起床と相関が認められ，就寝時刻の規則性は朝の食欲と相関が認められた。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能） （共著者：米野吉則，大和晴行，嶋崎博嗣）

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2．学会発表				
19. 幼児の起床・就寝の規則性からみた幼児の健康状態	共	2005年9月	日本幼少児健康教育学会 第24回大会 【秋季：大阪大会】 発表抄録集 P.20-P.21	幼児期の睡眠研究はそれまで起床－就寝時刻を平均値で捉えてきたが，本研究は起床－就寝時刻の規則性に着目し心身の健康状態との関連を検討した。結果，起床・就寝時刻の規則性は相互に関連すること，起床時刻の規則性は健康状態と関連することなどが示され，幼児の健康状態を評価する際，規則性という観点が今後有効な分析視点となり得ることを示唆した。 （共同研究につき担当部分の抽出不可能） (共著者：米野吉則，大和晴行，嶋崎博嗣)
3．総説				
4．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 乳歯期園児の口腔・食・体力調査事業報告書	共	2014年3月	一般社団法人 食育口腔育成支援センター 全38頁	2013年8月から9月にかけ,乳児期からの口腔の劣成長が心身に及ぼす影響について0歳児から6歳児766名の発育発達の状況を検討した報告書である。調査は口腔,姿勢,言葉,体格,体力の5つの側面から行い，その中の「結果報告」を執筆した。0歳児から座位姿勢の悪さ，落ち着きのなさを呈する子どもが2割強確認され，その要因として生活・遊び状況との関連性の分析から，養育者の遊び態度の消極性や1歳前後の動的姿勢制御を伴う遊びの少なさなどが影響している可能性を示唆した。 （担当頁：P.11-P.21) （共著者：大和晴行，小野大地，北野直子，中嶋名菜，松本直幸)
2. 兵庫県内の各自治体における子ども支援・子育て支援に関する実態調査（2011年度兵庫県委託「子育て支　援調査研究事業」報告書）	共	2012年3月	ひょうご地域子育て支援大学間連絡協議会 全99頁	2011年11月に行った兵庫県内50市区町村における子育て支援の実態把握を目的としたアンケート調査,及び自治体へのヒアリング調査をまとめた報告書である。その中の,「ヒアリング調査報告」において，小野市で行ったヒアリング結果から，独自的な取り組みとして，不育症治療助成や市長部局にあるヒューマンライフグループの創立等の経緯と効果について報告した。 （担当頁：P.86-P.91) （共著者）伊藤篤，勝木洋子，田端和彦，森田恵子，野呂千鶴子，吉岡洋子，寺村ゆかの，大和晴行
3. 「みんなあつまれ！にんにんキャンプ」活動実績報告書　(文部科学省委託事業：「青少年の意欲を育む体験活動に関する調査研究」)	共	2008年3月	ひょうご幼少児野外教育研究会 全32頁	2009年度に5歳児を対象として，2泊3日のキャンプ活動を9月及び11月の2度に渡り縦断的に実施したキャンプ概要と，キャンプ活動が子どもの育ちに及ぼす影響を検討した報告書である。その中の,「第3章実践効果の推定」において，子どもの描画及び保護者評価による成長側面推定尺度の分析について執筆を行った。結果，描画分析から複数回のキャンプを実施することで快感情を中心とした自由表現から，不快や頑張りを潜り，乗り越えた場面に描画内容が変化すること，また成長側面推定尺度の変容から感性や自立・挑戦的な態度の向上が認められることを報告した。 （担当頁：P.17-P.26) （共著者：嶋崎博嗣，石野秀明，辻俊幸，大和晴行)
6．研究費の取得状況				
1. 科学研究費補助金 研究種目：基盤研究（C)	共	2014年4月～2018年3月（予定)		研究課題名：乳幼児期における保育中の動きのおかしさの発達的変化と関連要因に関する縦断的研究 代表：廣陽子，分担：大和晴行
2. 科学研究費補助金 研究種目：若手研究（B)	単	2012年4月～2015年3月		研究課題名：3歳未満児の身体活動を規定する要因の探索と運動発達との関連性に関する調査研究
3. 科学研究費補助金 研究種目：若手研究　(研究活動スタート支援)	単	2009年4月～2011年3月		研究課題名：幼児の生活技術獲得を援助できる保育者育成のための総合的調査研究

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1. 2017年9月～現在に至る	尼崎市子ども・子育て審議会委員
2. 2013年9月～現在に至る	日本発育発達学会　会員
3. 2013年9月～現在に至る	日本小児保健学会　会員
4. 2012年～現在に至る	日本幼少児健康教育学会　常任理事
5. 2009年5月～現在に至る	日本乳幼児教育学会　会員
6. 2007年4月～現在に至る	日本保育学会　会員
7. 2005年4月～現在に至る	日本幼少児健康教育学会　会員